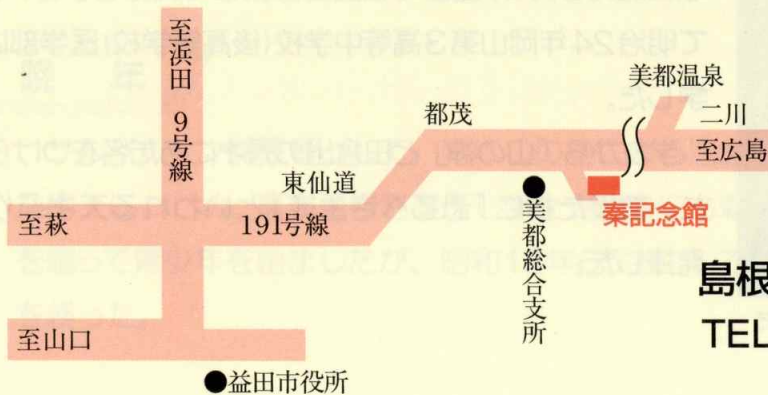


Dr HaTa

秦記念館



〔生家山根家に隣接〕



島根県益田市美都町都茂

TEL (0856) 52-2415

医学博士 秦 佐八郎

生いたち

「さあさん、ちょっと来てやんさい」と、母ヒデはいたずら盛りの少年^{さはちろう}佐八郎を呼んで、もの静かに土蔵の中で諭した逸話は、有名な話である。

明治6年3月23日石見国美濃郡都茂村大字^{やまねみちたか}都茂、^{とうひち}笹利山根道恭とヒデの8男に生れる。すぐ上の兄藤七(後漢文学者、大学教授)とは良く遊び良く学んだ仲良しで、叱られるのも2人づれの時が多かった。



生家 笹利(山根家)

秦家へ

藤七兄に負けず劣らずの勉強好きで、小学校の成績も抜群であったという。

やがて小学校卒業のころ同地医者秦家では一人息子の早世から、縁戚山根家へ養子話しを持込んだ。最初は兄藤七にする話しも出たという。

勉学



「岡山に出て勉強ができる」と、14才の少年佐八郎は秦家に迎えられて、益田の私塾進徳教社で英語を学び、やがて明治24年岡山第3高等中学校(後高等学校)医学部に入学した。

学友から「山の神」と田舎出の秀才にあだ名をつけられた。教授たちに「恐るべき生徒」といわれる天才ぶりを発揮した。

岡山在学のころ

上 京

岡山第3高等学校医学部卒業後、1年志願の兵役を務めて、明治30年3月岡山県立病院助手となった。井上善次郎博士いのうえぜんじろうから内科学、荒木寅三郎博士あらかきとらさぶろうからは医化学を学びながら上京の機会を待った。

郷里からは帰郷の催促もあったが、秦家の理解と荒木寅三郎教授の推せんがあつて明治31年8月上京、大日本私立衛生会経営の伝染病研究所へ入所、所長北里きたさと柴三郎博士しばさぶろうに師事することになった。

留 学

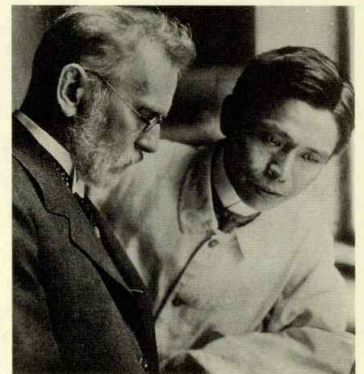


恩師 北里柴三郎博士

伝染病研究所に約10カ年、研究心旺盛な青年医学者として各種公務にも携わり、その間日露戦役にも従軍、後推されてドイツ留学が許された。

ドイツに3カ年、特に国立実験治療研究所のエールリッヒ博士の下で梅毒に対する化学療法の研究に没頭、遂に明治43年4月世界初の化学療法剤『エールリッヒ・秦606』を発見した。薬はサルバルサン(救うの意)(606号)と呼ばれた。

エールリッヒ博士は、旧友北里博士に「ドクター秦がいなければ、こんなに早くは成功しなかった」と感謝の手紙を届けた。



記念メダルにもなったエールリッヒと秦佐八郎の二人

晩 年

サルバルサン発見者として、特にこの薬による治療方法の指導や衛生思想の普及向上につとめ、慶大教授を歴任し学士会会員にも勅選された。郷土へは図書館を贈って青少年を励ました。昭和13年65才にして病にたおれ、その尊い生涯を終った。

記念館資料と展示品

秦博士の一生を物語る明治、大正、昭和3代にわたる多くの写真、手紙、参考図書をはじめ遺品類など約200点に及び多数の資料と等身大の肖像画、年表などを配置して、その人柄、功績等をより分かり易いように展示してある。

遺品類はじめ貴重な資料

大 礼 服

昭和8年帝国学士院会員に勅選され、その記念に大礼服を着用した正装の記念写真もある。

サルバルサン発見の記念メダル

エールリッヒ博士と秦博士が向い合って一点を見つめる姿を浮き彫りにした記念のメダル。

恩師、友人の写真

エールリッヒ、北里柴三郎、荒木寅三郎の各恩師をはじめ野口英世等友人の珍しい写真も多い。

医学標本類

サルバルサンの標本、梅毒標本写真と説明書等がある。

秦家観菊会の写真

珍しく秦家の家族全員、親戚、友人が集う秋の観菊記念で、潮道佐、綱川高美など郷土出身者の姿も見える。秦博士の朝顔、牡丹、菊作りは殊に玄人はだし。

土蔵の母子再現

生家裏手の土蔵には「さあさんちよっと…」の優しい母と諭される佐八郎少年を手作り人形で再現してある。